

幼稚園

平成 8 年 度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

教育 研 究 員 名 簿

主 題	分 科 会 主 題	地区名	幼稚園名	氏 名
幼児が生き生きと生活し主体性を発揮するための環境の構成	第 1 分科会 友達との関係を深めるための 指導の在り方 — 多様な体験ができる 生活の展開を考える —	千代田 中 央 港 新 宿 台 東 江 東 杉 並 葛 飾 江戸川	麴 町 月 島 芝 浦 四 谷 第 一 根 岸 第 三 大 島 高 井 戸 西 北 住 吉 松 江	田 所 恒 子 △尾 崎 直 美 新 山 裕 之 斎 藤 和 子 □小 倉 寿 子 若 林 千 恵 子 ◎小 木 曾 菜 由 美 飯 塚 慶 子 蓬 田 陽 子
	第 2 分科会 遊びが充実するための 指導の手だてを探る — 場の構成や素材・遊具の 使われ方に視点を当てて —	新 宿 江 東 世 田 谷 豊 島 荒 川 練 馬 足 立 日 野	富 久 東 砂 旭 池 袋 南 千 住 第 三 光 が 丘 あ か ね 江 北 第 五	山 口 千 春 石 田 淑 恵 和 田 幸 子 □神 郡 裕 子 石 田 敏 子 ◎徳 田 和 子 南 條 美 起 子 △小 宮 広 子

◎世話人 □副世話人 △記録

担当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事 齊 藤 美 代 子
 教育庁指導部初等教育指導課指導主事 岡 上 直 子

目 次

研究に当たって	2
<第1分科会>	
友達との関係を深めるための指導の在り方	
— 多様な体験ができる生活の展開を考える —	
I 主題設定の理由	3
II 研究方法	3
III 研究内容	
1 主題のとらえ方	4
(1) 友達との関係が深まるとは	4
(2) 多様な体験とは	4
2 多様な体験と友達との関係の深まりについて	4
(1) 多様な体験と友達との関係の深まりの関連を心情面からとらえる	4
(2) 多様な体験と活動場面とのかかわりを考える	5
3 実践事例	7
(1) 一日の様々な活動場面において、多様な体験をしている事例	7
(2) 学級全体とする活動の中で一人一人が異なる体験をしている事例	10
(3) 多様な体験を積み重ね、関係が深まっていく事例	11
IV まとめと今後の課題	13
<第2分科会>	
遊びが充実するための指導の手だてを探る	
— 場の構成や素材・遊具の使われ方に視点を当てて —	
I 主題設定の理由	14
II 研究方法	14
III 研究内容	
1 主題のとらえ方	15
2 実践事例	16
(1) 同じ場にいる一人一人の幼児の遊びの楽しさについて分析・考察した	
① 大型箱積み木で作った場に段ボール箱を提示したことで	
遊びが楽しくなった事例	16
(2) ものの使われ方や場の構成のされ方とその意味について分析・考察した	
① ものがあったことで役を意識して遊ぶことがより楽しくなった事例	19
② 場を構成することが遊びをより楽しくすることにつながった事例	20
③ 大型遊具を組み合わせて構成した場が	
遊びをより楽しくすることになった事例	21
IV まとめと今後の課題	24

研究に当たって

共通研究主題

「幼児が生き生きと生活し、主体性を発揮するための環境の構成」

幼児は、教師との信頼関係を基盤としながら、自ら環境に働きかけ、様々な遊びを生み出し生活を豊かにしている。幼児期は、遊びを通して自分の力で物事を行う充実感を味わったり、自己の存在感を感じたりしていく大切な時期である。この時期に、幼児は自分の思いをもち実現する意欲をもつ。また、友達とかかわり共感や葛藤などの様々な感情体験の中で、自他に気付き、友達と共に生活や遊びを楽しんでいくようになる。このような体験を積み重ねていくことが、幼児が生き生きと生活し、主体性を発揮していくことにつながると考える。

幼児一人一人が、自ら環境に働きかけ、遊びを十分に楽しむ中で、自分の思いを表すとともに、自信をもって生き生きと行動し、互いに心を通わせて充実した園生活を送るためには、幼児期にどのような経験が必要なのか、また、教師の援助はどうあるべきかを考えていくことが重要なことである。

そこで、今年度は、共通研究主題を「幼児が生き生きと生活し、主体性を発揮するための環境の構成」として、研究を進めることにした。研究に当たっては、2分科会を構成し、各分科会における研究主題及び、研究内容は次のように押さえた。

第1分科会

「友達との関係を深めるための指導の在り方

— 多様な体験ができる生活の展開を考える —

幼児が生き生きと生活し、主体性を発揮するためには、自分の思いを表し、自信をもって行動し心を通い合わせながら、友達との関係を深めていくような幼稚園生活を送れるようにすることが必要であると考えた。そのためには多様な状況の中で友達とのいろいろなかかわりを経験できるように生活の展開を工夫することが大切であるととらえ、幼児がどのような思いや体験をしているのかを探り、その幼児にとっての意味を明らかにし、友達との関係を深めるための指導の在り方を探ることにした。

第2分科会

「遊びが充実するための指導の手だてを探る

— 場の構成や素材・遊具の使われ方に視点を当てて —

幼児が生き生きと生活し、主体性を発揮するためには、日々の生活の中で、遊びが充実することが大事なのではないかと考えた。そのための環境として場や物に視点を当てて考えてみた。どこの幼稚園にも積み木や巧技台など場を構成するものや、遊びに使われる素材・遊具などは環境として置かれている。それらのものに幼児がどうかかわっているのか、それが遊びの充実とどうかかわりがあるのかなどを明らかにし、指導の手だてを探ることにした。

友達との関係を深めるための指導の在り方

— 多様な体験ができる生活の展開を考える —

I 主題設定の理由

幼児は、友達とのかかわりの中で友達の言動を感じ取り、友達のよさを吸収したり、自分なりに遊びを生み出す喜びを感じたりして、自分の世界を広げていこうとする。また様々な葛藤体験を経て相手の思いに気付き、友達と一緒に遊びをつくり出していく楽しさを味わうようになる。こうした過程の中で、今まで気付かなかった自分に気付いたり、友達の違った一面が見えてきたりし、友達への思いや関係が変化し深まっていく。最近の幼児の姿を見ると、友達と一緒に遊びたいという気持ちはあるが、気持ちや考えが伝わらないと友達と正面から向き合わずぶつかり合いを避ける、みんなの中では自分を表すことができないなど、友達とのかかわりを楽しみきれない姿が見られる。

そこで、幼児一人一人が自分の思いを表し、自信をもって行動し、友達と心を通い合わせながら、友達との関係を深めていくような幼稚園生活を送れるようにしたいと考えた。

特に本研究では、活動場面によって幼児が体験している内容と、その意味の違いに着目して、友達との関係を深めるためには、どのような指導が必要かを探ることにした。

II 研究方法

研究のねらい

幼児が友達とのかかわりの中で、どのような思いや体験をしているかを探り、その幼児にとっての意味を明らかにし、友達との関係を深めるための指導の在り方を探る。

研究の方法



研究主題の共通理解をする。

- ・ 友達との関係が深まるとは
- ・ 多様な体験とは
- ・ 多様な体験と友達との関係の深まりとの関連

研究保育において、友達とのかかわりの場面を行動描写法で記録し、下記の視点で考察し、友達との関係を深めるための指導の在り方を探る。

場面

- ・ 自発的な活動
- ・ 学級全体でする活動
- ・ 自分たちで生活を進めていく活動

考察の視点

- ・ 幼児が友達とのかかわりの中でどのような思いや体験をしているか
- ・ 幼児にとって体験がどのような意味があるか
- ・ どのような環境の構成や教師の援助が大切か

Ⅲ 研究内容

1 主題のとらえ方

(1) 友達との関係が深まるとは

幼児は、人とかかわることによって自分一人の世界だけではなく、自分の周りの世界にも目を向ける。そして、自分以外の人がいることや、違う世界があることを知る。友達が側にいることや、一緒に遊ぶことに心地よさや楽しさを感じられるようになると、友達との様々なかかわりの中で、楽しさや満足感、悔しさや葛藤等、いろいろな感情を味わい、友達の新たな面やよさに気付いたり、それを自分の中に取り入れたり、自分らしさを表したりしていくようになる。このように、生活の中で、友達といろいろなかかわりや体験をし、様々な感情を抱き、自分を表現していくのである。

友達との関係の深まりというと、友達と一緒にすること、仲よく遊ぶこと等の姿がイメージされがちである。しかし、そういう表面的なことではなく、友達とのかかわりの中でも、自分の思いや動きをのびのびと出し、自分自身をより豊かにしていくとともに、友達と気持ちを受け止め合い、それぞれがより豊かになっていくことを、友達との関係の深まりととらえた。

(2) 多様な体験とは

多様な体験とは、嬉しい・面白い・楽しい・悲しい・苦しい等、幼児にとって快となることも不快となることも含めて「幼児の心に染み入る様々な感情を体験すること」ととらえた。それは単に沢山の体験をさせることではない。幼児が自分の感性で、自分なりの感情を味わい、自分自身と向き合うことにつながったり、心を豊かにすることにつながったりするような様々な体験と考えた。

2 多様な体験と友達との関係の深まりについて

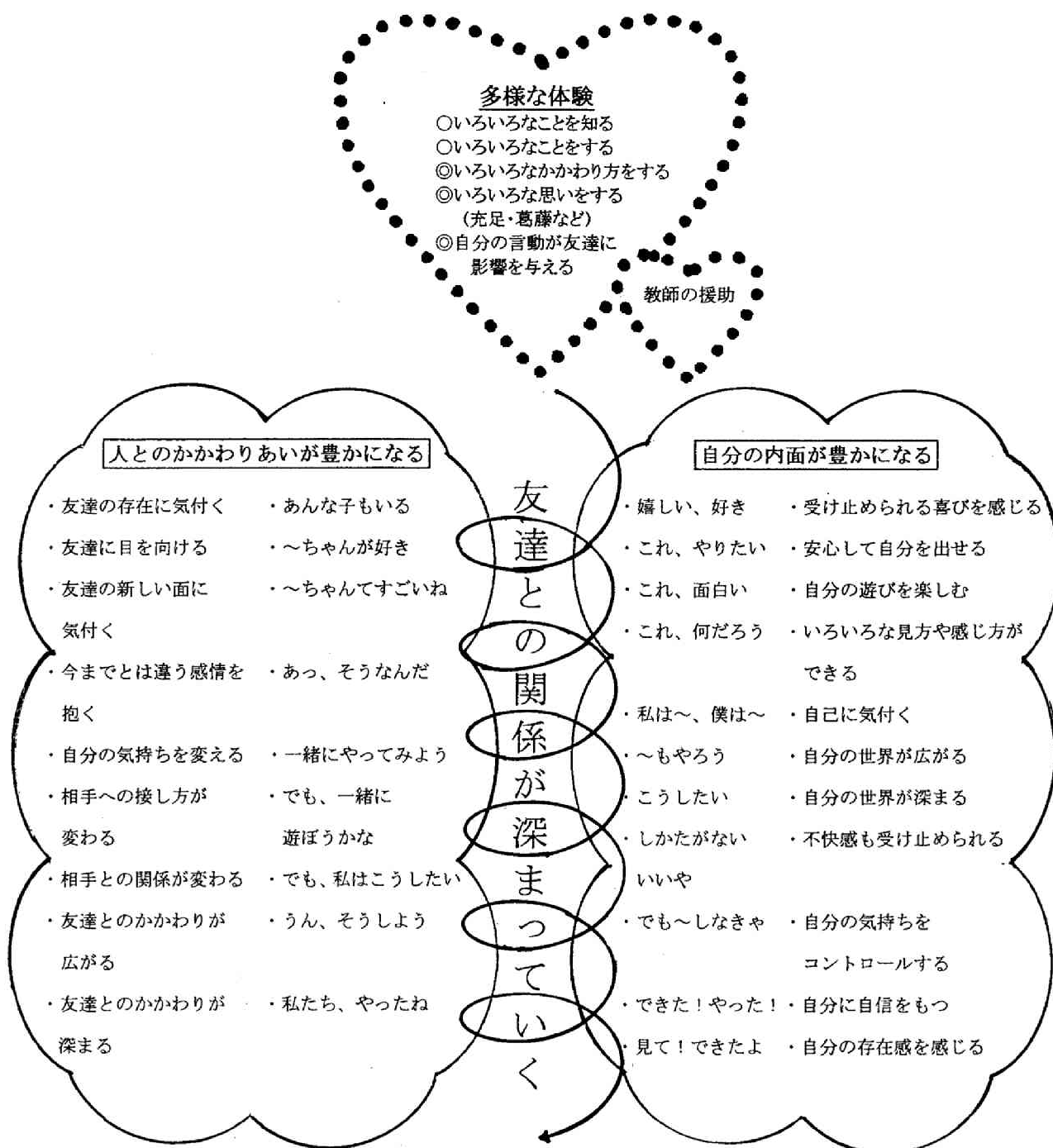
(1) 多様な体験と友達との関係の深まりの関連を心情面からとらえる

幼児は、人とかかわりの経験が乏しかったり、きっかけがつかめなかったり、自信がなかったりするために、自分の思いを十分に表せないことがある。

しかし幼児は、自分が愛されていることを実感すると安心し、人への親しみや信頼感をもち、自分らしさをのびのびと出せるようになる。また、多様な状況（遊び、人、場面、機会など）の中で、様々な感情を味わい、人とのいろいろなかかわりを経験することにより、自分を出すきっかけをつかんだり、自分の力に気付いたり、自信をもって自己を発揮したりできるようになる。その状況は、幼児一人一人によって異なるが、このような多様な体験がそうしたきっかけや自信を得ることにつながり、友達との新たなかかわりが生まれ、そのかかわりがより豊かなものになっていく。そして、友達との関係もさらに深まっていくと考えた。

多様な体験と友達との関係の深まりの関連について、図で表すと、次のようになる。

【多様な体験と、友達との関係の深まりの関連】



(2) 多様な体験と活動場面とのかかわりを考える

園生活の中で幼児が展開する活動を、自発的な活動、学級全体とする活動、自分たちで生活を進めていく活動の三つの場面ととらえ、それぞれの特質と関連について述べる。

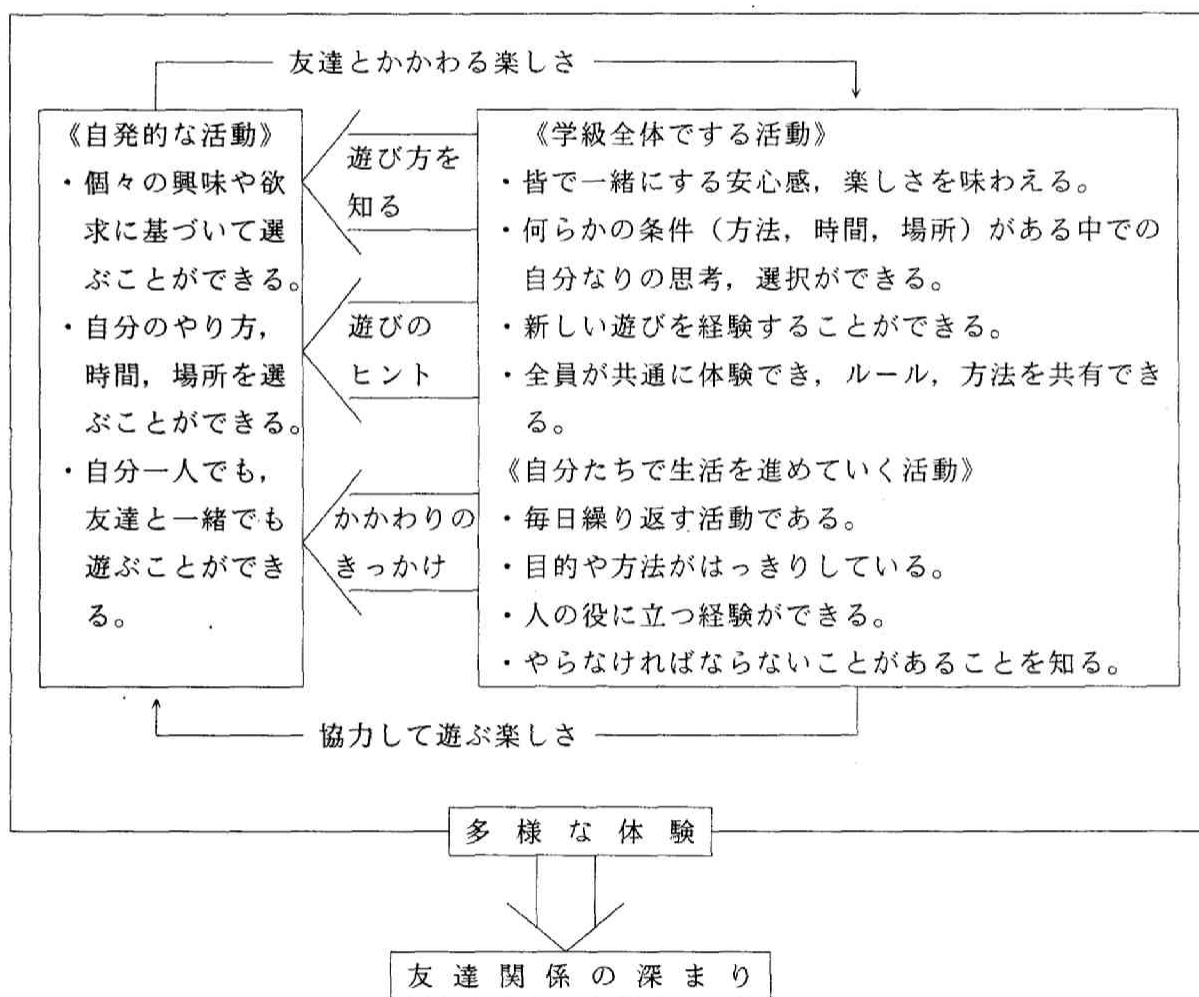
幼児は、生活の中で出会う様々な環境に対して自発的にかかわり、具体的・直接的に体験することにより成長・発達していく。こうした自発的な活動の中で、幼児一人一人がもつよさを十分に発揮しながら友達とかかわり、遊びを充実させていく。

その中で、自分の存在感を感じるとともに、互いを大切にすることを学び、友達とのかかわりを深めていく。

ところが、自発的な活動の中だけでは、友達とのつながりがうまくつけられなかったり友達関係を深めていくことができなかったりする場合がある。そうした、友達とのつながりや深まりのきっかけができるように、教師は様々な活動場面の中で援助していくことが必要である。

そこで、私たちは、学級全体でする活動や自分たちで生活を進めていく活動の特質を生かし、前述のような機会を保障することで、幼児が経験したことのない遊びを知らせたり、遊びのヒントや友達とのかかわりのきっかけとなる場としたりすることができ、また、遊びや友達関係が停滞した時に乗り越えるきっかけになることがあると考えた。

以下にそれぞれの活動の特質と関連を示した。



3 実践事例

(1) 一日の様々な活動場面において、多様な体験をしている事例

2年保育 5歳児 6月

<当番活動に自信をもって取り組む>…自分たちで生活を進めていく活動場面 9:10~9:35

A児は小鳥の当番をしようとグループのB児、C児、D児と一緒に鳥かごを水道のあるテラスまで運ぶ。キャベツの葉やごみ箱を取りに行くたびに「ちょっと待ってて。」と三人に掃除を待たせる。当番活動は手順もよく分かっていて、友達に「お水くんで来て。」「最初はたわしでこすって。」と手順や方法を教えながら、A児のペースで進めている。友達もA児に水入れを置く位置や洗い具合を尋ねたり、分からないことを聞いたり、承認を求めたりしている。

片方の鳥かごの掃除はA児一人でてきぱきと進めている。最後に止まり木をかごの中に止め「あー、できた。」とうれしそうにつぶやくが、葉差しが斜めになっているのに気付くとやり直し「ふー、できた。」と満足そうに鳥かごを見る。

また、もう一方の鳥かごを見て、D児が付けた止まり木の止め方が違うことに気付くと、「こうじゃないんだけどね。」と言ってやり直す。

《考察》

① 友達との関係を深めることにつながるどのような体験をしているか。

- 自信のある当番活動を友達と行う中で、必要な物を準備したり、それを使って仕事を進めようとしたりして友達をリードしながら積極的に活動に取り組む体験
- 自分のよく分かっている方法を友達に伝えたり、教えたりする体験
- 友達に聞かれたり、承認を求められたことに答えたりする体験

② 体験が友達との関係を深めることにどのような意味をもっていたか。

—他の場面では自分を強く出すことの少なかったA児にとって—

手順が分かり、見通しをもって取り組むことができる当番活動の中で、自分の思いや力をはっきりと表すことができたり、友達にも頼られたりする体験を積むことにより、その他の友達とのかかわりの中でも自信をもって自分を表せることにつながる。

<遊びを見付ける>…自発的な活動場面 9:40~10:45

製作コーナーに行き、まわりの幼児の動きを目で追い、同じような物を作ろうとしたり、折り紙を折ったりする。しかし、製作コーナーではしたいことを見付けられない。

しばらくしてその幼児がままごとコーナーに移るとA児も移動する。集まって話をしている幼児に対して、A児は一人でワゴンや畳を運び「うちんち、洋服屋さんね。」と洋服屋に必要な物を自分で選び、場を作ろうとする。D児やE児に「ずるいよ。」「一つちょうだい。」などと衣装などをたくさん取りすぎていることを指摘されると、衣装の入ったかごを渡し、他のものも全部片付け、製作コーナーに戻る。はさみで赤い紙を切り、クレ

ヨンで目を描く。そばに来た他学級の教師にそれを見せた後「あっそうだ。」と引き出しから水色の紙を出し、同じように切り、うろこの模様を描く。「子供の鯉のぼりも作ろうかな。」と黄色の紙で小さめの鯉のぼりを作る。三つの鯉のぼりを紙で作った棒に付けると園庭にいる教師に見せに行く。

保育室に戻ると、巧技台で遊んでいた隣の学級の遊びを見付けて加わる。自分のしている遊びを続けるために巧技台を降りるときに「私の場所、取っておいてくれる？」と並んでいる幼児に頼む。順番を待つ間、一緒に並んでいたF児と歌いながら『ブルドック』のじゃんけん遊びをし、笑いながら頬をつかみ合って遊ぶ。F児を含めた幼児3人で巧技台の脇に座り、寄り掛かりながら笑い合い、友達と体を触れ合いながら遊ぶことを楽しむ。

F児には梯子を渡りながら「ブーブー、デーブー。」と手を振り、「デーブー。」と答えてもらったり、「二人とも犬だね。」と話しかけ、「ワンワン。」と笑いながら言い合ったりして、同じような言葉や鳴き声を出すことでつながりを楽しんでいる。

《考察》

①友達との関係を深めることにつながるどのような体験をしているか。

- まわりの幼児の動きを見ながら、遊びを見付けようとするが見付からない体験
- 作品を教師に認められることにより満足感を味わう体験
- 気に入った友達と体を触れ合ったり、同じような言葉を出したり、動いたりしながら一緒に遊んでいるという気持ちのつながりを感じる体験
- してほしいことを動きや言葉で表しながら、自分のしたいことを続けようとする体験

②体験が友達との関係を深めることにどのような意味をもっていたか。

- 当番活動で友達をリードし、自分の思いや力を発揮していたA児にとって-
遊びを見付けようと試行錯誤する体験や反論できない体験は、相手への気持ちへの気付きにつながった。
- 結果を気にして、伸び伸びとした行動が取りにくいA児にとって-
巧技台での遊びは、友達と体が触れ合ったり、同じような言葉を言ったり、動きをしたりすることができ、自分の気持ちを解放して友達との遊びを楽しむことにつながった。

<みんなと一緒にドラキュラ鬼をする>…学級全体でする活動場面 11:10～11:35

ドラキュラ鬼を始める前に教師は人数の確認をしている。A児は“ドラキュラチーム”に入って待っていたが、教師や友達のやりとりを聞いて“人チーム”が少ないことに気付くと、すぐに教師の所に行き了解を得て、帽子を取り替え“人チーム”に移り、静かに待っている。

1回戦が始まると、陣地の中でうれしそうに飛び跳ねるが、最初は外へ出て行けない。出て行っても、そばで誰かが動いただけですぐに陣地に戻る。しばらくしてG児を狙って外に出るが、捕まえることに気をとられていて、後ろから来たH児にすぐにタッチされ、一緒に捕まったI児と共に笑いながら敵の陣地に連れて行かれる。仲良しのI児と一緒に大声で「助けてえ」と友達に助けを求める表情はにこやかである。少ししてJ男に助けて

もらい、I児と一緒にうれしそうに陣地に戻る。

2回戦では、一段と慣れてそっとだがすばやく外に出られるようになり、きゃっきゃとはしゃぎながら陣地を出たり戻ったりする。他の友達が敵を捕まえたのを見て「イエーイ」と喜んで飛び跳ねる。

《考察》

① 友達との関係を深めることにつながるどのような体験をしているのか。

○友達を頼ったり、友達の喜びに共感したりする体験

○互いに限定された場や状況の中で、安心して自分のしたい動きをする体験

その結果、安心して友達と触れ合うことができ、友達との親近感を感じたり、かかわりを求める気持ちを満たしている。

○教師の意図をくんで動き、認められ、満足する体験

② 体験が友達との関係を深めることにどのような意味をもっていたのか。

—特にやりたい遊びが見付からず一日の大半を過ごしてきた、この日のA児にとって—
「誰と何をして遊ぼうかな」と思い悩まず、友達と一緒に体を動かして遊べ、スキップもできたことで、それまでの少し憂うつな気持ちを晴らすことになった。

—教師に認められたい気持ちの強いA児にとって—

友達や教師の言葉を聞き、人数の調整の必要性に気付き、自分がチームを移ることでそれを解決したことは、教師に認められたい気持ちを満たすことになった。

—自由な遊びの中では友達に向けて自分の気持ちや思いを伝えられなかったA児にとって—
助け鬼の中で、友達に向けて「助けてえ!」「イエーイ」などと自分の気持ちを大きな声で伝えられたことや、その結果友達に助けてもらったことは、友達に対しての親近感や信頼感、友達と一緒に遊ぶと楽しいという気持ちをもつことにつながった。

③ 教師の援助や環境の構成の在り方

○A児は教師の意図や規範に添うような行動をすることで安定している。その背景には周囲の大人が、大人の意図に添うA児の行動を認めることが多かったことが考えられる。A児にとっては、当番活動や教師の指示を聞いて動く活動などの中だけではなく、自分がしたいと思って取り組んだ遊びの中で満足感や充実感を味わえるようにしていくことが必要である。

○出来、不出来を気にせず、思いのままに動くことができる巧技台での遊びでは、気持ちを解放し、友達との触れ合いも心から楽しんでいる。A児にとってはこのような友達とのつながりを楽しむ体験を積んでいくことが、友達との関係を深めていく基盤となると考える。

○A児は自発的な活動の場面では、やりたい遊びがなかなか見付からず、友達とのかかわりでも楽しい思いが十分味わえなかった。しかし、学級全体でしたドラキュラ鬼の場面では、友達に対して親近感や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができた。このように、一日の生活の中で、友達とのかかわりを楽しめるような学級全体とする活動があったことは、A児にとって、友達との関係を深めていくことにつながったもの

と思われる。

(2) 学級全体でする活動の中で一人一人が異なる体験をしている事例

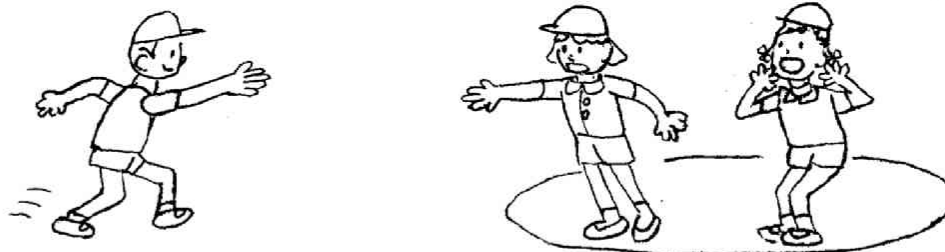
2年保育5歳児6月

同じ日の、同じ学級のA児とK児の姿を見ることで、一人一人にとっての学級全体でする活動のもつ意味とそこでの指導の在り方を探る。

<自発的な活動場面や学級全体でする活動場面でのK児の様子>

自発的な活動場面では、男児4人とマリオごっこで活発に遊ぶ。J児には「見てこい。止めてこい。」と命令口調で言われても「はい、わかりました。行きます。」と答え、好意的なかかわりをもとうとする。一方、力の弱い他の幼児に対しては「何でこんなふうにするんだよ。やめろ。」などと強い口調や行動で自分の思い通りに遊びを進めようとする。学級全体でしたドラキュラ鬼の中ではゲームが始まると、積極的に中央に出て行き、元気よく動き回り、友達を捕まえたり助けたりしている。捕まると、自分のチームの仲間に向かって手を大きく差し出し「助けてえ!」と大声で叫ぶ。友達がすぐ助けに来てくれると飛ぶように自陣に戻る。

※A児についてはP7～P9に前出しているのでここでは省く。



<二人にとってドラキュラ鬼のもつ意味の違い>

A児	・自由な遊びの中で特に遊びが見付からず少し憂うつだったA児は、やる事が決まっていた、友達との遊びやスキンシップが楽しめ、気持ちを解放することができた。	・自由な遊びの中では友達に向け自分の気持ちを十分伝えられなかったA児は、自分の気持ちを「助けてえ」と大きな声で伝えられたことで友達との信頼感を深めることにつながった。
K児	・運動量がある遊びであり、活動的なK児は、体を思い切り動かして遊びたい欲求が満たされ、心が解放された。 ・マリオごっこでは強い相手には従順で、弱い相手には自分の思いを通そうとしたK児は、ルールのある遊びの中で自分本意の言動をコントロールし、相手によって態度をあまり変えずに大勢の友達と触れ合って遊ぶ楽しさを味わえた。	・家庭では困ったときに援助を求めても、自分でやりなさいと言われることが多く、受け止めてもらいたい気持ちが強いK児は「助けてえ」と大声で叫び、それを受けてすぐに友達が助けに来てくれた喜びを繰り返して体験したことで、受け止められたい気持ちが満たされ、安定し、友達に親しみを感ずることができた。

《考察》

- 二人の事例から、学級全体で同じ遊びをしても、同じような動きをしても、そこで体験している感情は一人一人によって違うことが分かる。
 - 二人とも自発的な活動の中で体験できなかった感情を、学級全体で行う活動の中で体験することができている。
 - 日常の遊びの中ではあまりかかわらない相手や自分の思い（感情）を出し合ったことのない相手にも、結果として感情を思いきりぶつけることになっている。
- これらのことを踏まえて、教師は一人一人の幼児にとっての活動の意味を問いながら、他の活動では得られない体験が、学級全体でする活動で体験できるように、また発達を促す体験となるよう指導内容や方法を工夫していくことが重要である。

(3) 多様な体験を積み重ね、関係が深まっていく事例

L児とM児のかかわりの変容から友達関係の深まりについて探る。

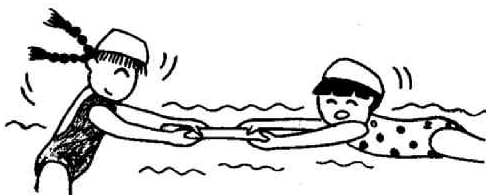
< 4歳児学級での姿 >

L児は、3学期の1月に転入し、製作や外遊びなど、自分の好きな遊びを喜んでしていた。M児たちに関心を持ち、一緒に遊ぼうとする。M児はそれを受け入れず、遊びを探しているN児といることで安心して自分を出し、ごっこ遊びなどをするようになった。教師は、M児が安心して自分が出せることに共感しながら、L児のよさや気持ちを伝えた。L児には、いろいろな友達と接する機会をもてるようにした。

< 5歳児学級1学期の姿 >

— 友達のよさに気付いていくM児 —

- ・ N児と製作をしたり、音楽に合わせて踊ったりすることを楽しむ。経験がなく自信のないことには慎重で、緊張感をもちやすかったが、踊りが認められることで積極的になり、多少の失敗を笑ってすませられるようになる。
- ・ L児の水遊びの様子を面白そうだなと思って見たり、使っているビート板を引っ張ってあげたりする。



— 自分を表現できるようになったL児 —

- ・ M児と遊びたいという願いがかなわず、教師と過ごすことが多くなる。
- ・ N児が欠席の時、M児と遊ぶ。踊りは得意ではないが、同じ動きをして一緒に遊ぶことを楽しむ。
- ・ 7月頃、同じ動きをしてついていけるだけでは物足らず、M児を中心とした5人のグループから抜けるようになり、職員室のベッドに寝込むこともある。また同じグループに戻り、言いたいことを言えずにいる。
- ・ 水遊びでは、自分の考えた泳ぎ方に挑戦し、いろいろな友達と遊具を使って遊び、自信をもって動けるようになる。

《考察》

①友達との関係を深めることにつながるどのような体験をしているか。

M児 ○遊びの中で自信をもち、友達の中で自分のしたいことを伝え、実現していく体験

○いろいろな友達と一緒に遊ぶことの楽しさを実感する体験

○友達の新たな面に気付く体験

L児 ○好きな友達と遊べたうれしさと不安をもちながらも、自分の思いを行動で表す体験

○のびのびと水遊びを楽しむ中で、自信をもって友達とかかわる体験

②体験が友達関係を深めることにどのような意味をもっていたか。

M児 ○N児との間で思いを実現してきたM児にとって、他の友達に思いを出して遊びを楽しんだり、友達のよさに気付いたりすることにつながり自分の世界が広がった。

L児 ○一緒に遊びたかったM児と遊べたうれしさを感じながら、自分の気持ちに気づき葛藤する中で、自信のもてる遊びと出会い、友達とのかかわり方が変わっていった。

☆教師は、こうした二人の内面の変化を読みとり、受け止めていく。L児が、得意な水遊びの中で力を出して、他の幼児から認められるように援助していった。

<9月>

2学期が始まるとL児は、いろいろな友達と自分のしたい遊びを楽しみ、運動会に向かって意欲的に自分の考えを言う。M児らを誘って、リレーや綱引きをしたりして、1学期のグループで遊ぶようになる。M児は、自分の思い通りに遊びを進める友達がなくなり、不安定になり泣いて登園することもあったが、L児に誘われ一緒に遊ぶ喜びを味わう。

<10月下旬>

「みんなで積み木や巧技台を使って海賊ポケット号を作ろう。」と教師が話す。M児・L児ら5人のグループで話し合い、取り組む。M児は、紙に描いた取っ手をフープに張り付け舵にしようとL児らに説明する。(図1)手で取っ手の必要量を測り「9個いる。」と伝えると、L児は描き始める。M児は、「模様を描いて。」と頼んだり、不足の分を自分で描いたりしている。(図2)



図1

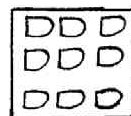


図2

L児は、遊戯室からいなくなったM児を探しに行く。「Mちゃん、どうして黙って行ったの。」と聞く。M児「食べ物なくていいの?」と言う。L児「そういうことじゃなくて、急に何も言わないで行ってさ、仲間なのになかなか帰ってこなかったじゃない。」と不満な気持ちをはっきり言う。

《考察》

① 友達との関係を深めることにつながるどのような体験をしているか。

M児 ○自分の思い通りにならないことを感じとる体験

○友達のよさを受け止めながら、一緒に一つのことを実現していく体験

L児 ○相手に認められ、自分の力を発揮する体験

○友達と一緒に、自分の思いを伝え、一つのことを実現していく体験

② 体験が友達関係を深めることにどのような意味をもっていたか。

M児 ○友達のよさを受け入れたり、友達と一緒にすることの楽しさを感じたことは、人とのかかわりが豊かになり、より関係が深められる。

L児 ○自分の存在が認められたことで、安心して自分を出すことができ、友達の新しい変化や発見につながる。

③ 教師の援助と環境の構成の在り方

○友達とのかかわりが互いにじっくりしない時期、教師がそれぞれの気持ちにそって、辛い時に寄り添ったり、葛藤を一緒に受け止めてくれたりしたことが、幼児の気持ちを安定させ、友達への親しみを感じることに繋がっている。

○一人一人の幼児にとって、多様な体験ができるような場や機会をつくったことで、自信をもったり、相手の違う面に気付いたりする機会になり、M児・L児にとっての変容につながっていったと考える。このように、多様なかかわり方ができる体験の場や機会をつくることが大切である。

IV まとめと今後の課題

- 同じ活動をする中でも、一人一人の幼児が体験し、感じとっていることがそれぞれに違っていることが分かった。幼児一人一人が体験している内容やその意味をとらえて、指導の在り方を探っていくことが重要である。
- 友達とのかかわりを豊かにするためには、幼児が主体性を発揮して生き生きと自分の遊びを楽しみ、友達と遊ぶ中でも自分の思いや力を十分に出せるようにすることが大切である。そのためにも一日の生活の中で一人一人の幼児が、自発的な活動、学級全体とする活動、自分たちで生活を進めていく活動など、どこかの場面で自分の力を発揮できるような場面をつくっていくことが必要である。
- 友達との関係が深まることは、自分が変わることで相手も変化するということを実感することである。自分の新しい部分に気づき、友達の今まで見えなかった部分が相手のよさとして見え、互いの心が通い合うように指導することが必要である。
- 今後は、更に実践を深め、幼児一人一人にとって必要な体験が得られるための環境の構成、指導の在り方を探る。

遊びが充実するための指導の手だてを探る

— 場の構成や素材・遊具の使われ方に視点を当てて —

I 主題設定の理由

幼児期は、直接的・具体的な経験を通して人間形成の基礎を培う時期である。そこで、幼稚園の教育では、幼児が直接的・具体的な経験が得られるよう遊びを通して指導することが重要である。「遊びに真剣に取り組んで、楽しさや充実感に浸っている時、子供は自分の存在を全身で受け止めているのです。こうした自己の存在感を確かにもつことが『いのち』『生きる力』を伸ばす原動力になってゆくのです」（小田豊 幼稚園じほう元年6月号より）と述べられているように、幼児が発達に必要な経験を得るためにも遊びを充実させることが、重要である。しかし、実際の保育の場面を見てみると、場作りはしても遊びの流れが見いだせなかったり遊びに必要な物を作ってもそれが生かせなかったりなど、十分楽しめていないのではないと思われることがよくある。このような実態や悩みを話し合い、幼児が遊びを楽しむ充実感を味わうための指導の在り方を明らかにしたいという思いを共通にした。また、幼稚園教育の基本は環境を通じた教育であることを踏まえ、幼児にとって身近な『環境』としての素材、ままごと等そのまま使われる遊具、積み木など場を構成するための遊具など、『もの』を窓口としてその使われ方、構成のされ方や遊びにとっての意味を探ることにした。

II 研究方法

[研究の構想図]
共通研究主題

幼児が生き生きと生活し、主体性を発揮するための環境の構成



研究主題

遊びが充実するための指導の手だてを探る
— 場の構成や素材・遊具の使われ方に視点を当てて —



研究のねらい

遊びの場の構成や、素材・遊具の使われ方に視点を当て、楽しさが生み出される要因を明らかにし、遊びが充実するための手だてを探る。



研究内容・
方法

研究保育や事例研究を通して、場の構成のされ方や使われている素材・遊具について、その特性、遊びの中における意味、幼児が経験している内容や発達との関連を探る。

<分析・考察の観点>

- ・場の構成がどのようになされ、それはどのような意味があるのか。
- ・素材・遊具はどのように使われ、それはどのような意味があるのか。
- ・一人一人の幼児はどのようなことに楽しさを感じているか。



遊びの楽しさが生み出される要因をとらえ
指導の手だてを考える。

Ⅲ 研究内容

1 主題のとらえ方

研究を進めるに当たって、「遊びが充実する」ということについて、幼児が実際に遊んでいる姿から次のようにとらえた。

○目的や目当てをもっている。 ○目的を達成するために試行錯誤している。

○マイナスの感情も含め、多様な感情を体験している。 ○発達に必要な体験をしている。 ○実現する喜びがある。 ○満足感がある。

例えば、遊びに使うものを作ろうとしている場面で、うまくいなくて何度も挑戦し、苦しいことや課題を乗り越えて、最後には自分の思いを実現し、満足感・達成感を味わう。このように、幼児が満足感や達成感を味わい、楽しさを感じられることが「遊びが充実する」ということではないかと考える。そこでそのための指導の手だてを考えるに当たり、教師がどのように環境を整え、具体的に援助をしていくことが必要であるのかについて、「場の構成」と「素材・遊具の使われ方」について視点を当てた。

＜場の構成について＞

「場の構成」とは、幼児が遊びを進めていく際に、遊びが展開されている場のことで、遊びにとって意味のある空間が生み出されることととらえた。また、「場」には次のような意味があると考えた。

○安定できる。 ○友達と一緒にいられる。 ○友達とかかわれる。 ○遊びが展開できる。 ○自分のイメージ、あるいは友達と一緒にイメージを実現する。

したがって、積み木や段ボール等で囲ったものだけでなく、グランドピアノの下をそのまま家に見立てたり、一本の大きな柱を拠り所にして集まったりしていることも遊びの場が構成されているととらえた。また、これらの場に自分たちで作ったものなどを持ち込んだ場合も含めて、広く、場の構成ととらえた。

＜「素材・遊具」について＞

素材とは何かを作り出す基になる材料であり、遊具とは体を動かして遊ぶための大型の固定遊具や積み木のように構成して遊ぶ遊具、ボールなどのように運動的な動きを引き出すもの、砂遊びに使うものなど様々なものがある。幼稚園では、教師が幼児の興味・関心を読み取った上で、幼児の発達を促すためにふさわしい素材・遊具の環境が工夫されなければならない。幼児は自らそれらの環境に働きかけ、取り入れながら遊んでいる。素材・遊具が遊びの中でどのような意味をもち、どのように取り入れられることで遊びがより充実するののかということ、素材・遊具の特性を踏まえながら探りたいと考えた。

2 実践事例

(1) 同じ場にいる一人一人の幼児の遊びの楽しさについて分析・考察した。

① 大型箱積み木で作った場に段ボール箱を提示したことで遊びが楽しくなった事例
(2年保育 6月上旬 A児 B児 C児)

場面	場や物の意味	教師の援助	A児の言動(気持ち=楽しさが生み出された要因)
大型箱積み木で車の枠を作る	大型箱積み木で囲まれたことで自分たちの場となる。	・車の内部について言葉にする。 (A児だけでなくB児C児にもイメージを出してほしい)	・積み木で四角に囲う。(CDの聴ける車を作りたい=作った車の中でCDが聴けるという期待) ・教師の言動を受けて発言する。(僕もそうしようと思っているんだよ=次に何を作ろうという目的)
運転台を作る	段ボール箱が提示されたことで運転台のイメージがふくらみ、一緒に作ろうという気持ちももてる。	・積み木がなく <u>段ボール箱</u> を提示する。	・ <u>段ボール箱</u> を運転台の位置に置き、割り箸を2本持ってくる。B児からめうちを取り上げB児の開けた穴の左右に2か所穴を開ける。(ハンドルやスピードメーターの穴を開けよう=イメージを実現していく楽しさ)
ハンドルとスピードメーターを作る	<u>割ピン</u> 、 <u>割り箸</u> 、 <u>めうち</u> 、 <u>カッター</u> が使えたことで車の細部のイメージをより本物らしく実現できた。	・ハンドル作りについて助言する(素材の選択や用具の扱い方を知らせたい)	・チーズの丸箱のハンドルが小さいという教師の指摘を受け入れB児のやりかたで作る。(小さかったからB児のやりかたで作るならおそう=試行錯誤しながらイメージを実現していく楽しさ) ・段ボール片で針を作り運転台の真ん中に割ピンでつけ、丸を描いて数字を書き、教師に「できた。」と言う。(スピードメーターを作ろう、できたこと知らせよう=自分のイメージが実現できた嬉しさ)
CDをかけて運転する。	運転台ができたので本当に運転している気になれた。		・ハンドルを動かし、CDをかける。B児と運転しているつもりのやりとりをする。(僕たち車の運転してるんだぞ=運転しているつもりになって動く楽しさ、友達に自分のイメージを受け止めてもらって一緒に遊ぶ楽しさ)

B児の言動（気持ち＝要因）	C児の言動（気持ち＝要因）
<ul style="list-style-type: none"> ・積み木で四角に囲う。（A児に誘われたから車を作ろう＝A児の誘いによりもてた遊びの次の目的） ・車の内部のイメージを浮かべ思ったことを言う。（C Dは車の後ろに置きたい＝教師に受け止められ、思ったことが言えたうれしさ） ・めうちを持ってきて段ボール箱に穴を開ける。 ・割ピンを持ってくる。（ハンドルやスピードメーターの穴を開けよう＝イメージを実現していく楽しさ） ・固い段ボール片を見付けるが、教師に柔らかい方を提示される。丸い型として皿を見付け、マジックで丸をたどってカッターで切ろうとする。切れないので教師に立てて切るよう助言される。切ったものを取り付ける。 （ハンドルを作る材料を見付けよう、丸い形を見付け型をとって切ろう、切れないから先生のやり方でやってみよう＝試行錯誤しながらイメージを実現していく楽しさ） ・A児に何を作っているか聞く。途中からA児の書く数字を言う。（僕も数を言おう＝イメージが実現される楽しさ） ・ハンドルを動かし、C Dをかける。A児と運転しているつもりのやりとりをする。（僕たち車の運転をしているんだぞ＝運転しているつもりになって動く楽しさ、友達に自分のイメージを受け止めてもらって一緒に遊ぶ楽しさ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・そばで見ている。（これから何をするのかな＝次の遊びを見付けたい気持ち） ・車の内部についてのイメージを浮かべ思ったことを言う。 （あれ、この車の中にはハンドルがないぞ＝刺激を受けイメージを浮かべる楽しさ） ・B児の持ってきた割ピンを段ボール箱の穴に挿して内側から留める。（僕もやりたいなやってみよう＝仲間の一人として動けた喜び） ・A児、B児のそばで見ている。教師に言われ、B児が切りやすいように、段ボール片を押さええる。（どうやって作るのかな、じゃあ僕が押さえよう＝仲間の一人として動こうとする気持ち） ・車の中の椅子に座っている。 （もうすぐ、車が動くぞ、あっ動いたぞ、楽しいな、自分も仲間だ、うれしい＝車に乗っているつもりになっている楽しさ、仲間の一人になった喜び）

《考察》

- 同じ遊びでもA児はイメージを次々と実現する楽しさ、B児はまわりの刺激を受けてイメージを出し実現する楽しさ、C児は友達のイメージを受け止めて仲間の一人として動く楽しさを感じており、一人一人が感じる遊びの楽しさに違いがある。
 - コンピューターゲームに興味がある、ドライブの楽しい経験があるなどイメージが想起される背景としてその幼児の体験や感動がある。
 - 積み木の車ができると次に車の内部についてイメージが想起され、内部ができると次は運転する、というように構成された場や作られたものが次のイメージを喚起し、遊びの流れが生み出されている。
 - 場が囲まれたことで友達関係があまり深まっていない3人にとってイメージを共有したり、ふくらませたりしやすくなった。
 - 互いに刺激し合ったり、受け入れ合ったりする友達関係や思いや要求を受け止めてくれるという教師との信頼関係が遊びの楽しさを支えている。
 - イメージの実現に対する素材や遊具の提示、ヒントなどの教師の働きかけがある。
- 考察から、ここでは「素材や遊具の提示」に視点を当て、この遊びが充実していく要因となったと思われる「段ボール（箱）」について特性を踏まえた適切な提示について考える。

— 段ボール（箱）の特性 —

- 中に入る、重ねる、囲む、敷くことなどで遊びの場が作れる。
- 切る、つなげる、曲げる、色を塗る、何か描く、物を貼る、突き刺す、他の素材と組み合わせる、等様々に加工できるため幼児のイメージを実現しやすい。
- 軽量で持ち運びやすい。○扱い方によっては壊れやすい。○安価で手に入れやすい。

— 段ボール（箱）の提示（経験の過程と援助の見通し） —

- 中に入る、つぶす、立てる、重ねるなどの特性を体で感じ取る経験を大切にする。
- 教師の援助を受けながら、実際に遊びの中にどのように利用できるのか知ったり、考えたりできるようにし、幼児が自由に選んで使えるような置場を作るのもよい。
- 幼児が必要に応じて教師に要求できるようになったら、イメージに合ったものをその都度提示していく。その際、用途や意図を確認し、イメージをより明確にしたり、ふくらませたりしていく。
- 長期的には、様々に加工できるという特性が生かせるように、他の素材との組み合わせを工夫したり、加工する際の用具の扱いが身に付いていくようにしたりするなどの見通しをもった指導が大切である。

— 教師の援助について —

段ボール（箱）を提示していく時には、まず教師自身が素材の特性やそれがどう遊びに生かされていくのかをしっかりとらえていかなければならない。幼児の意図や遊びを楽しんでいる部分に合った素材やその活用のし方がいろいろと頭に浮かぶようにすることでより適切な提示ができる。また、それだけにとらわれずに幼児の自由な発想を受け止めたり引き出ししたりできるような柔軟な対応が大切である。

(2) ものの使われ方や場の構成のされ方とその意味について分析・考察した。

① ものがあったことで役を意識して遊ぶことがより楽しくなった事例

(2年保育 4歳児 5月下旬)

幼 児 の 姿	ものの使われ方とその意味
<p>・ Y児がふわふわマットで囲った家を作り，食器やテーブルを持ち込む。S児I児R児K児が次々に来て仲間に入る。</p> <p>・ R児は猫，K児はお母さん，Y児S児I児はお姉さん役になり，猫を散歩に連れて行ったり，学校へ行ったり料理をしたり，それぞれがかかわりながら思い思いに動いている。</p> <p>・ そのうちR児が病気になって病院に行くことを思い付き，教師に医者になってもらう。I児S児K児も熱が出た，怪我をした，などの言葉を言いながら教師とのやりとりを楽しむ。</p> <p>・ Y児が病院ごっこに興味をもち，薬やカルテを作ってくる。教師がきっかけを作ると看護婦になったつもりで友達とかかわりながら動く。</p> <p>・ K児S児の学校に行く，洋服を脱ぐなどの動きや言葉から，教師がタオルハンガーやランドセルを持って行く。二人はスカートを干したりランドセルを背負って学校に行ったりする。</p> <p>・ K児が教師にノートが欲しいと言うと教師が二つ折りにした紙を出す。K児はステープラの止め方を教師に教わりノートを作り，鉛筆，消しゴムと共にノートをランドセルに入れ背負う。</p>	<p>・ マットの囲い，食器，テーブルがあることで，Y児が家ごっこをしていることが他児にも分かる。</p> <p>・ 食器，スカート，紙粘土製のごちそう，リボン製の散歩ひも，手提げ袋などを使ってそれぞれが役になって動くことを楽しめるものがある。</p> <p>・ 必要になった時に幼児が自分で作することを期待して，教師はフィルムケース，ひも，紙片，紙テープを使い聴診器，薬，包帯にする。</p> <p>・ 自由に使ったり見立てたりできるものがあることで，思いついたことをすぐにやってみることができる。</p> <p>・ ハンガーやランドセルがあることで役の動きを引き出し，役になりきって動くことを楽しむ。</p> <p>・ ランドセルがあることでノートなどの文具を思いつき，遊びに使うものを作る。作ったもので遊ぶ。必要に応じて道具の使い方を習得する。</p>

《考察》

- ままごと道具や聴診器などがあることで家ごっこや病院ごっこをしていることが伝わり，散歩ひもがあることで役になっての動きが生み出されたり友達と触れ合えたりしたように，身近に扱えるものがあることでイメージが伝わったり，動きが引き出されて遊びの楽しさにつながっている。
- ランドセルが出されたことで勉強に使うノートを思い付き，遊びに使うものを作る経験をしたように，次のイメージが想起されて遊びが更に楽しくなっている。
- 選んで使ったり見立てたりできるものがあるとともに，自由に見立てたり扱ったりできる雰囲気も大切である。
- いろいろなものや道具を思ったように扱えるようになることがやりたいことを実現するための素地となり，遊びの充実につながるので，4歳児よりいろいろなものや道具に触れて経験を積み重ねていけるようにする。

② 場を構成することが遊びをより楽しくすることになった事例

(2年保育 5歳児 6月上旬)

幼 児 の 姿	場の構成のされ方と意味
<p>・ S児とE児は、以前に段ボールで作った掃除機と冷蔵庫を保育室からホールへ運ぶ。Y児が積み木を運んで来るとK児が来て仲間入りする。</p> <p>・ 4人は次々と箱積み木を運んで来て、ホール中央に四角に囲った家を作る。次には保育室のままごと置き場から、それぞれが魚焼き網、ザル、しょうゆ差し、皿など使いたいものを次々に運び込む。</p> <p>・ S児「私赤ちゃん」Y児「私お母さん」E児「私5歳ね」と自分のなりたい役を友達に言う。それから役に必要なものを、ままごと置き場に取りに行く。</p> <p>・ 教師に要求してレースの布を出してもらう。S児が教師を客として招き入れる。教師との会話から更に靴置き場ができ、次に2階建にしたい思いが出てくる。</p> <p>・ 2階建にするにはどんな作り方をすればよいか教師とS児とがやり取りをしながら、板積み木を使って作ることを思い付く。</p> <p>・ Y児M児E児もS児の考えを受け入れ、一緒に板を運んで来る。長方形積み木の上に板積み木を積み、その上にまた長方形積み木と板積み木を積んで2階を作り上げる。</p>	<p>・ 自分たちで作った掃除機や洗濯機を使って遊ぼう、昨日みたいな家を作って遊ぼうと、ものを媒介にして目当てが一致する。積み木で囲うことで「自分たちの場」という空間ができる。</p> <p>・ 遊びに必要なもの、イメージに合ったものを選び遊びの場に持ち込む。</p> <p>・ 役になりきるために家の雰囲気により近づけようともものを運ぶ。</p> <p>・ 現時点で自由に扱えるものの範囲で最大限にイメージを実現していこうとする。</p> <p>・ 2階建の積み木の家、運び込んだものがお家ごっこの雰囲気を盛り上げている。</p>

《考察》

- 以前に作った魅力的なものが媒介となって「お家ごっこをしよう」という共通の目当てが見い出され、家作りやイメージにあったものを選ぶ楽しさ、役になりきって遊ぶ楽しさ、自分たちで遊びを進めている楽しさなどを感じている。また、そこでは、友達が自分のイメージを受け止めてくれたり、一緒に実現したりする楽しさを感じてきている。
- 楽しかったことをまたやろうと友達と気持ちが一一致した心地よさ、イメージしたことが友達に伝わり一緒に実現していく楽しさ、一緒に遊んでいる友達がそれぞれのやりたいことを互いに受け止め合える心地よさ、など友達の中で自分が受け止められ、イメージを実現していく楽しさ、その過程でイメージを実現するための見通し、技能などを経験している。
- 積み木は形や重さに安定感があり、平面を区切るだけでなく、空間（立体）を構成するのに適している。そこで、「2階建にしたい」という幼児の欲求を、幼児の技能の範囲で実現することができるような場所と積み木の量があったこと。また、実現に向けて、積み木の構成の仕方など、教師の助言があったことが遊びをより楽しくすることになった。

- ③ 大型遊具を組み合わせて構成した場が、遊びをより楽しくすることになった事例
(2年保育 5歳児 10月中旬)

場面	幼児の姿		場の構成の され方と意味
	忍者ごっこ(A児B児C児D児)	うさぎの家(B児F児)	
大型箱積み木で場を構成する	<p>①登園後すぐ、ホールで、A児とC児は手慣れた様子で、昨日の続きの2階建ての忍者の城を作る。</p> <p>③隣に、A児B児C児D児が2軒目の忍者の家を作る。</p>	<p>②昨日の続きのうさぎの家を忍者の城のそばに作る。</p>	<p>・それぞれの役に合った場を作り、イメージを実現している。</p> <p>・長い積み木で場をつなぐことで、行き来ができることが、共通に確認できる。</p>
個や友達と楽しむ	<p>A児B児は『買物に行く』と言い、『バッタの術ビューン』『カエルの術ピョンピョン』などと役になりきりながら外へ行き来ができるようにする。</p>	<p>C児D児E児F児は家と忍者の城を行き来し、保育室の製作コーナーで剣と巻物を作る。</p>	<p>・教師の働きかけで鉄棒が作られ、忍者の修行の場のイメージがふらむ。</p>
	<p>教師の援助 巧技台を使おうとしているA児とB児を見て『(そばにあった室内用鉄棒を示しながら)これ使う?』と言う。</p>		
	<p>The diagram illustrates the play area layout. On the left is the '忍者の城' (Ninja Castle) and on the right is the 'うさぎの家' (Rabbit House). Both are constructed using '大型箱積み木' (Large box blocks). A '巧技台' (Gymnastic table) is positioned between them, with a '鉄棒' (Iron bar) attached. A 'マット' (Mat) is placed on the floor between the castle and the house. A 'すべり台' (Sliding platform) and 'はしご' (Ladder) are also shown at the bottom of the diagram.</p>		

場面	幼児の姿			場の構成のされ方と意味
	①の場	②の場（C児E児）	③の場	
鉄棒・構巧成技す台るを	A児B児 修行の場として鉄棒を構成する。（巧技台9段を2個・室内用鉄棒・緑マット）	C児E児 赤ちゃんうさぎの遊び場を作る。 （巧技台9段を1個・はしご・すべり台すべり台の下に青マット）	D児F児 ②ができてから、「赤ちゃん、ここにもつなげようか」と赤ちゃんうさぎの遊び場を作る。 （ビーム2本・巧技台9段を2個・赤マット）	
個や友達動ときのを楽しむ	忍者の修行の場と赤ちゃんうさぎの遊び場でそれぞれのイメージで友達とかかわり合いながら遊ぶ。赤マット、青マットと敷いたことで、色から火や水をイメージし始める。F児『火があがってきた』D児『忍法泳ぐの術』B児『熱いお湯でも泳げるの術』E児『アチアチ、落っこちなくてよかった』			・忍者の場とうさぎの場がとなり同士にできることで、互いにかかわる場となる。 ・場に使ったマットの色から、様々なイメージが想起される。
	A児B児 剣・巻き物を作り忍者になりきって遊ぶ。	C児D児E児F児 F児は教師に『はしごの上にマット載せていい?』と聞く。 はしごの上に黄マットを乗せてその上に自分たちが乗って、ずり落ちる楽しさを味わう。		・マットがはしごの上をすべり落ちる楽しさに幼児たちが魅かれて集まる場となる。
城や戻家るに	A児『もう夕方だよ。早くいかないと。寝るぞ』の声を受けて、急いでそれぞれの家に戻る。			・最初に作られた城や家は、「寝る」という動きで幼児が戻る場になっている。

※番号は場の構成された順番を表す。

《考察》

- 一緒に遊びを進めている友達と場を構成していくことにより、仲間意識の確認や、イメージの共有ができた。また、「積み木をつなげる」「橋を架ける」等の場が構成されることで、それぞれの動きがつながり、次のイメージが想起され、遊びがより楽しくなった。
- 大型箱積み木や巧技台で遊んだ先行経験を生かし、積み木や巧技台などの組み合わせを考えたり工夫したりして場をより複雑に構成していくことができ、楽しさが感じられた。また、今まで一緒に遊んできた経験の中で、イメージが共有化されてきた積み重ねがあるので、個々の動きがつながり、遊びの流れが生み出された。さらに大型箱積み木や「忍者ごっこ」で遊んだという直接この遊びにかかわる経験だけでなく、虫とりや自然にかかわるなどの多様な経験によりイメージが支えられている。
- 幼児が遊びの新たな展開を模索している時など、タイミングをとらえた教師の働きかけにより、場を再構成することで、次のイメージが想起された。
- 友達関係や教師との関係が安定しているので、それぞれの幼児が自由に遊びを進められる雰囲気がある。

考察から、ここでは「場を構成する遊具」に視点を当て、「大型箱積み木」「巧技台」について特性を踏まえた適切な提示について考えた。

— 大型箱積み木の特性 —

- ☆並べる、積む、囲うなどで遊びのきっかけになる場が作れる。
- ☆様々な空間を構成し、広さ、高さ、暗さ等を感じながらイメージを実現できる。
- ☆幅、形等が規格化されているので組み合わせることによりイメージした形に構成できる。

— 巧技台の特性 —

- ★登る、渡る、とび下りる、ぶら下がる等の運動的な動きができる。
- ★様々な組み合わせから動きを引き出し、イメージを実現する場になる。
- ★友達と一緒に組み立てることで、かかわったり協力したりする経験ができる。

— 大型箱積み木・巧技台の提示（経験の過程と援助の見通し） —

- 積む、並べる、偶然できた形を見立てる経験を経て、自分の場や友達とかたまれる場が作れるようにする。
- 囲う、積む、敷く、つなげるなどの経験が十分にできるように、教師が使い方を知らせたり、友達が使っている姿を見る、仲間に入る等して、工夫して遊べるようにしていく。
- 他の遊具と自由に組み合わせたり、見立てて使ったりして、イメージを実現していく過程を積み重ねる。
- 遊びの状況や幼児の実態に応じて、置き方や量を工夫する。
- 発達段階に応じて安全に使えるような経験を積み重ねる。

IV まとめと今後の課題

遊びが充実するためには、具体的にどのような援助をしていったらよいか、場の構成や素材・遊具の使われ方に視点を当てて研究を進めてきた。その中で次のようなことが分かった。

1 場の構成について

幼児が遊びを始めるきっかけは様々であるが、一人一人が安定できる場があることが大切である。幼児は場を構成していくことで、それぞれのイメージがはっきりしてきて、その場で「～をしよう」という思いや目的がはっきりしたり一緒に遊んでいる友達とイメージが共有されたりしていく。このように、場を構成することは遊びの展開の大きな部分となっており、作ったものや遊具を使ったり組み合わせたりして構成することで、よりイメージが引き出され、遊びが充実していく。また、同じ場で同じように動いていても一人一人が感じている楽しさに違いがあり、一人一人の楽しさの内容をとらえていくことが必要である。以上のことから、教師の援助としては次のことが大切である。

○幼児が自分の遊びの場を意識できるようにする。○自分たちで構成できるものや遊具を準備しておく。○幼児のイメージが実現できるように援助する。○どのようなものをどのように使うかなど、自分たちで考え、構成していけるような経験を積み重ねていく。

また、こうした援助をする際には、場の構成にとって適している素材・遊具等の特質や多様な活用の仕方について教師が把握していることが大切である。

2 素材・遊具の使われ方について

幼児期のイメージを実現する遊びは、素材・遊具を扱うことで展開していくことが多いと言える。素材や遊具があることで見立てたり役になって動いたりする楽しさを味わうことができる。また、遊びに素材・遊具を取り入れて必要なものを作ったり使ったりすることで、イメージを実現させて遊ぶ楽しさを味わい、一緒に遊んでいる友達にイメージが伝わっていくことができ、更に遊びの楽しさが生み出されていく。そして、素材や遊具を場の構成に使ったり組み合わせたりして使ったりするなど、多様な使われ方をしていくことで、より遊びの楽しさが生み出され、遊びの充実につながる。また、自分のイメージに合った素材や遊具を自由に扱い、使いこなすことができる力が育っていることが大切である。以上のことから、教師の援助として次のことが大切である。

○幼児が遊びに必要なものを使ったり作ったりして、自分たちの遊びを実現したいと思った時に、実現しやすい素材・遊具が用意されている。○使いこなし自由にイメージを実現させていくためには、自由に使える雰囲気大切に作る。○自分で見付け、取り入れて実現していける力や安全に扱える態度を育てていく。

また、教師が素材や遊具に対して、その扱い方や活用の仕方などについて多様なイメージを想起できることも大切である。

これらのこととともに、幼児の遊びの楽しさを支えているのは教師や友達との信頼関係や認め合える人間関係であり、温かい人間関係を育てていくことが大切である。

<今後の課題>

今後は、実践を通して幼児の発達を踏まえ、長期の見通しをもった環境の在り方と教師の援助を明らかにすることが課題である。